

百合子賞 佳作 受賞作品

戀

郡山ザベリオ学園中学校

喜

母はよく笑う

綺麗に花が咲いたとき

おいしいものを食べるとき

好きな歌を歌うとき

とても些細なこと

一見、代わり映えのしない日々

小さな喜びを見つけて

ふんわり幸せそうに笑う

小さな喜びを見つける

それが幸せに生きるのに必要なことなのかもしれない

母の目元に刻まれた笑いじわを見ながら思う

怒

父は怒らない

なぜだろうと尋ねると

怒ると疲れてしまうから

でも時には怒ることも必要だよ

と答えた

どういう意味か分かっていなかったけど

今なら分かるような気がする

怒りは守るためにある

大切なものを壊されないように

だから、

怒りをためすぎてはいけない

それは、

心のコップが涙でいっぱいになって溢れてしまうことだから

そうなると疲れるより辛い

怒りはわかってもらいたい気持ちの塊

だから時には、怒ってわかってと心から訴えることも必要なのかもしれない

ちよつとだけ息がしやすくなる秘密

哀

姉が泣いていた
声も出さず ただただ静かに
肩だけ小さく震えていた
いつも前を行く姉の後ろ姿
この日はとてもとても小さく見えた
ただただ哀しい 哀しかった

哀しみの感情

進化の過程でなくなればよかったのに

喉の奥が

胸のあたりが

ぎゅーつとなる

全身で誰かを想っている証なのかもしれない

哀しくてたまらないのは

きつとその人を

愛しく想うから

進化し続けても永遠に存在するだろう

この哀しみは

楽

夏休み

宿題息抜きに一〇〇〇ピースパズル
姉と妹と三人でテーブル囲んでおしゃべりしながら
楽しい一時

同系色の難問箇所

手当たり次第

ピタッとピースがはまったら

三人揃って

「おー！」と歓声

途中で乱入 弟が端の方から壊し出す

慌てて制止する

ちよつと夢中になりすぎて、正座の足がしびれ出す

中三 コロナ禍

楽しみは日常に

たくさんたくさん溢れてた

愛

弟の後ろ姿を見ると

ぎゅつと抱きしめたくなる

小さいだろう心臓の音を聴くと

こんなにも小さな存在が一生懸命生きていると感じて

ぎゅつと抱きしめたくなる

懸命に生きる蝉の声を聴くと

花の香をかぐと

心地よい風を感じると
ぎゅっと抱きしめたくなる

すべてが愛おしく感じて

地球を

世界を

ぎゅっと抱きしめたくなる

喜びも、怒りも、哀しみも、楽しさも

愛しいという感情でさえ愛おしく感じて

自分の心をぎゅっと抱きしめたくなる

世界に愛おしいが溢れたらいいなあなんて考えながら

今日もわたしは愛しき世界を抱きしめる

(指導教諭／柳 沼 とも子)

《作品の意図》

感情についてかきました。

《作品の寸評》

作品名は読み手にとって大切な第一印象となる。「戀」は作品の中に溢れる「ぎゅっと抱きしめたくなる愛おしさ」に通じ、身近な家族の喜怒哀楽をゆるやかに経由して、コロナ禍の鬱屈した気分を振り払っていく明るさに満ちている。

父を描いた「怒」は、「怒りはわかってもらいたい気持ちの塊」と評し、心から訴える怒りには「ちよっとだけ息がしやすくなる秘密」と結び、自分の生き方を考えるきっかけを得ている。思春期の中学生にとって、自分の家族について言葉にすることは簡単ではないと思うが、コロ

ナ禍で家庭で過ごす時間が増え、お互いをより意識する機会が多くなったことがこの作品の底にはあるように感じられた。

また、ほとんどの中学生は、詩作にあたり題材選びに苦心する。作者が、思いを詩に書くという難しい第一歩を踏み出すために「喜怒哀楽」の感情を入り口に選び、身近な家族の様子を見つめて言葉にした点は参考になると思われる。「喜」に描かれた母の「小さな喜びを見つけて ふんわり幸せそうに笑う」人生がいかに豊かで「ぎゅっと抱きしめたくなる愛おしさ」に満ちているか、人生の価値や意義について考えさせられる秀作である。

(審査員／柳 沼 智 恵)